

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
 編集／光の子 編集委員会
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
 TEL／0480-72-3883
 振替／東京 3-128022
 印刷／社会福祉法人 共愛会

暑中お見舞

申し上げます

社会福祉法人 光の子どもの家



絵・中島 英子

平和を実現する者

(マタイによる福音書 第五章九節)

理事長 福島 勲

戦後五〇年目の八月一日を迎えようとしている。平和を願ってさまざまな催しが各国で行われている。

アメリカの原爆展に日本がクレイムをつけた。国民感情を逆撫ですると。ロシヤも英国も盛大な戦捷記念式典を催した。

英国は各国の首脳陣を招き、敵国だったドイツをも招いた。しかし日本からはだれも招かれなかった。戦争体験者の在郷軍人らの強い反対からだとか。

戦争の悲惨を訴え、平和を願う催しだとしても、受けとりようでは戦捷祝いであったり、逆に「ノーモア広島」が「忘れのなパールハーバー」になったりしかねない。

この辺で、個人の良心的痛みはともかく、周辺の国々から責められる戦犯の古傷のいやしと清算が望ましい。

全世界がこれほど戦争を厭い平和を訴えているかに思われるにかかわらず、またぞろ核兵器

の試験や貯蔵を行っている。ドストエフスキーが、戦争では必ずしも弾に当たって死ぬとは限らない。生き延びる可能性は残っている。しかし、死刑宣告はこれとは違って、全くの絶望で悲惨である、と自らの体験から言っている。

そのころの戦争はそうであったろうが、今日の核や細菌などの化学兵器の戦争では、人類は必殺必滅であろう。

戦争防止に強力な兵器の存在を主張する武装平和論者もいる。しかし、ローマ皇帝ネロの先生だった哲学者セネカの「錠前は泥棒を引きよせ、土蔵破りは戸締まりのない家には侵入しない」との言葉は一考に値する。

原爆の父と言われたハンガリー生れの物理学者レオ・シラードは、あの戦争で、日本に原爆投下をしないようにと、トルーマン大統領や国務長官バーンズ、また、マンハッタン計画の責任者オッペンハイマーらに説き廻っ

深謝して今関公雄前施設長を送る

菅原 哲 男

前施設長今関公雄氏とは約四半世紀のお交わりをいただいている。前職の東洋英和女学院短期大学の教師であった頃、湯河原の城山学園に実習生の巡回指導に見えられたのが最初の出会ひであった。

その日、応接室での話がはずみ、とうとう拙宅において頂き親しく酌み交わす一夕をもった。以来、年に一度そんな一夜を楽しみにおいてなるのを心待ちにするようになり、私はその後埼玉に要請されて移り、氏との交わりはいよいよ深まっていったのである。

今から十三年前、同志と光の子どもの家の創設を企てて、設立準備会を結成したが、熱意ばかり高ぶる成否の判断としないその準備会に氏は逸早く参加され、役員七名に進んで名を連ねて下さった。

それから氏の人生は幾度も揺れ、その度に最も困難な選択肢を当然のように選ばれ、私たちと行動を共にすることを厭われなかった。

それまで設立準備会を主宰していた私への妨害と法人認可後の養護施設への激しい開設反対運動の中で、施設長を他に求めよとの当局からのご指導をいただき、実現しないだろうと予想しながら要請した火中の栗のような施設長職を、「菅原さんだったら心中しなければね！」と、快諾して下さった時の感動は今も鮮明である。

それからの氏は、反対運動の拠点に出かけ、丁寧に説明を繰り返して、協力を求め、認可が遅れて出来た負債の解消や支援者の開拓と拡大に、まさしく東奔西走されたのである。

そして十年の歳月は過ぎたが、その間の氏のこのでの居心地は決してよい時ばかりではなかったことを誰よりも私はよく知る。

三年前にこの地域への教会建設を幻に得て、北東埼玉伝道所を設立し、この度、埼玉県立衛生短期大学教授への招聘は、実に天の采配であり氏のための新たな天地での活躍を心から期待している。

これまでのお働きと担われた苦難多き時間と場面の数々を、心から感謝し、ますますのお働きと、上よりの祝福を切に祈る者である。

エッセイ

デザインのことなど

県立高校美術教諭 中島 陸雄

私は、Kさんと向かい合って

コーヒーを飲んでみた。Kさんが私に言った。「あら、ピースをお吸いなんですか?」私は答えて言う。「はい、そうです。」

「たばこお好きなんですか?」ピースは強いて言いますよね。どうしてピースなんですか?」

私は、この二つの質問、たばこは好きなのか、なぜピースが好きなのかについて、明確に答えることができなかった。

かつて私は「夜明けのプロムナード」という随筆集を出したことがある。そこで、その二〇一ページを読んでもらいそれを答えてくれた。少々余計なこととも書いてあるが、そっくり引用してみたい。

デザインの報酬

娘が、あるスーパーマーケットから、その会社のマークのデザインを頼まれた。現在使用しているマークを新しくデザインし直すのである。総合的なデザインとして、今流行のC・I

(コーポレート・アイデンティティ)というものを本格的にやるとすれば、何千万円もかかる

そうであるが、今度の話は、そんな大がかりなものではなく、マークと社名の文字だけである。先日、試作を五十枚程送った。

そこで思い出されるのが、アメリカのレイモンド・ロウイである。戦後、昭和二〇年代に圧倒的に美しいデザインで登場したたばこ、ピースのデザインをした人である。

レイモンド・ロウイは、ピースの箱のデザイン料として、当時のお金で百万円とか百五十万円とかを要求して来たというのである。専売公社ではびっくりして、ゼロの数字を間違えているんじゃないかと疑ったというのだが、その辺

にデザイン先進国アメリカと、後進国日本との、デザインに対する決定的な意識の差が、はっきりと見える。こんな小さな箱ひとつに百万円は常識外だと言う考えもあったのであろう。藍

だが、聞き入れられなかった。戦後シラードは物理学をやめ生物学の研究に転じた。(クライン・神のない聖都)

戦争の原因は複雑だ。民族、宗教、階級の問題、それに経済問題が大きい位置を占めている。いささか古い学説のマルサスの人間問題も忘れられない。幾何学的に増える人口と算数的な食料の生産とのアンバランスが戦いを招く。

聖書は間違った動機で求める欲が戦いを惹き起こすという。(ヤコブ書四・二)

個人にせよ、団体や国家にせよ強い欲望が平和を乱している。人間の利己的遺伝子の強烈さ

は、自己の生き残り、自己複製のため、他をかえりみることなく、自己主張して存在を確保しようとする。アウグスチヌスが、精神がどのように肉体に結びつくかは、全く不思議で人間には理解できないことである。しかし、この結合こそ人間であると。言っている。単に生物的な人間の構造を言っているとは思えない。良いことも考え願う天使的な思考

能力のある人間が、肉体の枠を嵌められると野獣にもなる。キリスト教をはじめ、諸宗教もみな共に人類愛とか平和を唱えながら、各自見苦しい恥ずべき歴史を刻んできた。宗教の威信地に陥ちた感じの今日、われわれはもう一度真摯に、イエスの言葉と業とに目を向け耳を傾けねばならない。今われわれは、具体的に直接関わりのある施設という窓を通して、平和について考えさせらることは、家庭の平和ということである。

それは限定された平和論だ、といわれるかも知れないが、両親の不仲、離婚、貧困、疾病など子どもの心を与える影響は甚大なものである。こうした痛みの中で、歪められた人間性の集積が平和の攪乱にまで繋がるのである。マリヤは、すべてのことを心に納めて思いめぐらした(ルカ・二・一九)とあるが、世の親たちには、神を畏れつつ思慮深く思いめぐらす、信仰の英知が求められている。

出かける時、我々は彼に電車賃、昼食代などを貸してやったものだが、彼が帰ってきた時には、何と腕時計を新しくし、オーバークーパーを買った。パチンコのデザイン料は、彼が予想した金額をはるかに上まわっていた。彼は得意であった。その後彼は、夏休みに故郷の岩手県に帰った。そこで新しいデザインの仕事を依頼されたのである。お店のショウウインドウのディスプレイを一新するとういう仕事を、凝り性の彼は一心にやり遂げた。都会的なセンスで美しく仕上げた満足であった。レイモンド・ロウイ程のデザイン料は無理としても、パチンコ屋ぐらいいはどうかと、期待していた彼に支払われたアルバイトの報酬は、何とくつ下二足と、店名入りの手ぬぐい二本だけであった。「こんなもんだよ」と彼は笑っていた。

さて、私の娘であるが、あのマークと文字のデザインで、レイモンド・ロウイ並か、手ぬぐい一本になるのか、その報酬が見ものである。

『ほの暗き世に向いて』
学者もどきのつばやき(15)

山形大学医学部教授 仙道 富士郎

阪神大震災の深い傷にのたうち廻っているわが国を、またまた恐怖の風が吹き荒れている。私などに今度の事件を論ずる資格などないことは承知の上で筆を執ってしまった。

今この時に何かを語るとすれば、「オウム」のことを避けて書き始めるのはとても白々しく出来そうにない。しかし、だからといってまとまったことを書けるわけもなく、ただ何かに促され書き始めてしまったという事である。

事件の全貌が明らかになるに従って、ただ唯然とせざるを得ないというのが、皆の思いであろう。私も全くその通りである。中心で人を動かした人間はともかく、その周囲のいわゆるエリート群が、本当にサリンや銃でこの国に革命を起こし、自分たちが天下を取ろうと考えたのであろうか。

何と馬鹿なことをと嘲笑うことはいとも易い。しかし、その嘲笑が自らに返されてくるものであることも忘れてはなるまい。すべて教育が悪いのだと断ずることも可能である。

しかし、今あるわが国の経済的な繁栄はこれすべて就学率一〇〇%の義務教育を基盤にした優秀な人材に依存していたのではなかったか。それとこれは違

トムソーヤたちの朝 5

日本キリスト教団東大宮教会 永野 三恵

本来なら五月は輝くような新緑の季節であり、木々の清潔な香りに満ちている季節でもある。

ところが今年はずいぶん五月晴れは殆どなくお天気もばつとしくなかった。その上、人間の常識では考えられない事件が次から次へと起きた。宗教の名のもとに、人間をロボットのように操り自分の配下に治め、更に飽くなき欲望を燃やし仮想王国を築こうとしたひとりの人間のしたこと。その下で、一見真面目そうな若者、もう分別をわきまえたはずの大人たちが手や足をひきおこした。その報道(まだ確定とは言えないが・・)を読む度に「何故? どうして?」

とか「彼等が今まで家庭で学校で社会で身につけてきたものは何だったのだろうか」と、思いをめぐらした日々であった。

戦後五〇年。夢中で走り続けてきた日本人が、大切な精神的なものを置き去りにして来たそ

うという理屈はここでは成り立たない。経済的な繁栄もオウムをも含んだすべてを我がものとして受け入れなければならぬのではあるまいか。

そして、今一度立ち止まって、本当に自分は何をしてきたのだろうかとうと内省するときに、私たちが一人一人に与えられているように思えてならない。

山形新幹線の上り列車の車窓から、遠くの山を眺めると、五月半ばというのにまだ新緑は芽吹かず、灰色の雑木林は淋しい。それにしても、杉林は何と無粋で奇妙な形をしていることか。いつも濃緑色で突っ立っている稜線のなめらかな曲線に植林の境目が直線で交わっているのも不釣り合いである。

と、列車は普段は新幹線の停車しない駅に臨時停車した。

目を近くに転ずると、雑木の黄緑の何と美しいことか。そしてよく見てみると、各々の木の色はみな異なっているのだ。いや、一本の木でも枝の先端部と根本で違っている。

早春の野びるのよう黄色の極く優れたものから、殆ど真緑のものまで、S VARIATIONは見事である。野びるよりも少し緑の優った色が好きである。花も木もよく識別できない私にも、この一瞬の黄緑の VARIATION は、さわやかな思いを与えてくれた。列車はまた動き出し、近景はもう眺めることが出来なくなってしまう。

今日は東京日帰りである。遅い帰宅を待っている妻に、黄緑のことを話そうか。彼女は肯んじないかもしれない。私の好きな東北の早春のコバルト色の空を道産子の彼女は好きにはなれず、やはり宇宙の果てまで続いているような紺碧の北海道の空が好きだとよく言っているから。



もしろかった。ありがとう!」と大きな声で皆に挨拶して、お父さんと手をつないで帰って行ったK子ちゃんはこの遊びに大満足したことだろう。

この小さな光景を見て、私は「こうでなくちゃ子どもは。こうでなくちゃ」と久し振りに晴れやかな気持ちになった。遊びを通して子どもは学んでいく。人と人との基本的なルールや、して良い事と悪い事を。体を使って遊び、泣いたり笑ったり豊かな子ども時代を過ごしたならば、あのオウム集団に見られるような能面のような無表情で、自分の頭で考える事を放棄してしまっただような人間にはならないだろう。

子ども時代は、親から見れば無駄な事の連続だが、その無駄が大切だと思う。回り道が多ければ多い程人間は包容力のある豊かな存在になれるような気がする。そして人間が神になるのではなく、小さな欠けの多い人間をそのまますっぱり「よし」として受け入れられている心の平安が与えられていればどんなにかのどやかな事であろう。

子どもたちの季節

仙道家

光の子どもたちの家で三年目のこの春、担当は変わらないが四人もいる来春受験の子どもたちの生活調整とバランスなどを考慮した引越しと同時に、仙道家に生活の拠点を置くことになった。

殆どの子どもたちと初めて暮らしの仲間になった。それまでも学習会などで性格の違いなどから衝突の多かった逸郎とは、生活ののささいな事までことごとく採めながらのスタートだった。

ゴールデンウィークという消費優先のあり方を見直し、憲法記念日や子どもたちの日の意義を確認して生活を考える、十回目の子どもの準備をそんな中で始めた。

家ごとにアイデアを出して企画するための実行委員会は高校生を交えて構成される。仙道家では綿菓子とアメ釣りの模擬店を出すことになり、祐子さんと釣竿をつくる環、アメを浮かべるプールを倉庫の奥まで探し出す一志、手に怪我をして綿菓子を作ることが出来ない悔し涙を浮かべる漢子、綿菓子作りの練習に余念がない由紀子さんと悠子、おこぼれを貰おうと付きまとう詩美。将司と信一はアメを入れるカプセルを探しまわっている。それぞれ準備を楽しんでいるようだ。みんなと一緒が苦手な城山兄弟をのぞいては・・。それでも綿菓子の機械を運び込む城山幸司、準備の買い物に走り回る逸郎などの姿が嬉しく、皆それぞれ何か思いをもちながら役割を担い、それぞれの働きが一つの方向を向いていた。

五月四日。今にも泣き出しそうな空を見上げながら始めた準備が終わる頃は、空に明るさが戻ってきた。十一時、子ども祭りは開始された。家を出たり入ったり忙しそうに逸郎を始め、仙道家のみんなの働きにまともりが見え始め、長い列を作るお友達や沢山のお客さんに囲まれて輝きだしていた。

あれから、何があっても同じ方向を向ける家の基盤のようなものが出来つつあり、ここでガンバレ！、と思っている。白石 輝雄

光の中で

佐藤家

園庭の木々が緑を深めて茂り、そのわずかな隙間から射し込む日矢に思わず目をくらまされる季節になりました。

ついこのあいだのことです。それまで忘れかけた頃に思い出したように電話をしてくることはあったが、行方を知らさず、会いに来なくなつてからかれこれ四・五年もたつたらう山上兄弟の父から、例のごとく、本当にしばらくぶりに電話がありました。

普段は、ここに来てからの八年間一度も会いに来てはくれない行方の知らない母親のことも、父親のことも全く口にしなない子どもたちも、音信不通の時間などなかったかのようにニコニコとその電話に対応しています。親子関係の不思議さと、自分と子どもたちの関係とが対になってあぶり出されるような思いになる瞬間です。

父は、昨年あたりから東北の地方都市で、どちらも再婚同士で相手の子どもたちも一緒に新しく家庭を作ったように言っていました。連絡もなく、何年も会わずにいられ、その上、子どもたちに何の相談も断りもなく再婚している父に腹立たしさを感ぜながらも、この子どもたちを母のように忘れずに、覚えていてくれてありがたい・・と、複雑な思いになります。

子どもたちと生活しながら、母がいて父がいる、そして兄弟姉妹も、というごく普通の暮らしから遠く離れている子どもたちの位置をしばしば思い知らされます。

そんな普通からの位置を縮めるために、彼らが自分の子どもの子どもの手をひいて養護施設などの門を叩かなくてもよいような、普通の大人に成長していくための関わりを、時には嫌になつてしまふようなやりとりをもっともつともしなければ・・と思いを深めます。思いとはうらはらに、自分のことにかまけてしまい、何もできないでいる自分の無力さに焦燥を感じながら・・。 神田 幸枝

原田家日記

岩崎 まり子

「もしもし、俺。十五日過ぎに帰るから、夕飯食わないで待って。」

四月にここから初めて社会に出発っていった匠から、初給料で夕食を馳走したいという嬉しいような、恥かしいような誘いの電話であった。いつも口では「あにき、連絡あった？ふうん。」と何気なさを装っていても、やはり心配し、会いたがっていたのだ。その日、兄からの誘いに加津子は、顔中笑顔にしておめかし。穴水指導員の中で、いざ、近所のファミリーストランへ。

今の職場がどんなにきついのか、専門用語を多用しながら語る匠。

それは、こんなに頑張っているんだよ、認めてくれ、というサイン。「すごいね。大変だね。頑張ってるんだね。」と言うと、満足そうな顔。変わってないな、と懐かしいような思いで見つめていると、「大変だけど、それも鉄塔に上るまでだと思ってるんだ。」

そして、ひとしきり、加津子の受験を励まし、氣を利かせて代金を払おうとする私に、「本当に俺がおごるから。」とレジに立つ匠の背中を見ながら、単純に「嬉しい」と思った。

苦労が報われるとか、報われないとか、人はよく口にするが、そういったことではなく、ただ、ただ嬉しかった。

子どもたちは、思春期を猛スピードで駆け抜けていく。付いていけない、追い付けない、そう思うことが多くなっている。「担当が私じゃない方がいいのではないか」「私では、駄目だ」と子どものマイナス行動に出会う度思う。ただ、その一方で、「今投げ出してはいけない」とも思う。その繰り返しで、これまでやってきた。

匠はよく「帰る」という言葉を使う。ここへ来ることを、だ。その言葉の重さが、私をここに居させているような氣がする。今、目の前で反発する子どもたちも、いつか、「帰って」くるのだろうか。

河のほとり

旗井の家

アパートへ引越した当初は雨戸も知らず、外によその人がいると外に出るのをためらっていた勇。

どんなに配慮を尽くして建てられたものであっても、これまでの《施設》での生活が、どれだけ社会から離れていたのかを目の当たりにし、これからの生活の中でどうにかしていかなければ・・と考えさせられた。

そんな勇がある日の夕方、近くに住む大家さんと話をしていて姿を見つけ、挨拶ぐらいは出来るようになったか・・とホッとしたり。そして、勇がなかなか戻ってこないのを外を見ると、草取りをしている大家さんの横にちよこんと座って何やら話し込んでいる。三十分もしただろうか、帰ってきた勇に「何を話してたの？」と尋ねると、「いろいろだよ。大家さんの年齢とか、息子さんのこととか。あつそうだ倉ちゃんのことも聞いていたよ。先生の名前なんているのつて。」「あつそう、まさか年齢まで教えてないでしょうね。」「うん。聞かれなかった。」「あつそう。」・・どうやら三十分の間大家さんと世間話に花を咲かせていたようである。

最近隣の人が外にいてもたじろぐことなく、時には「すごい雨ですなあ。」などと時候の挨拶までしている様子。今ではグループ一番の近所づき合いの勇である。

中国人の家族がほんの三カ月ぐらい近所で生活していたが、言葉や習慣の違いから仲間になれないその子どもと、大の仲良しになり、「かわいそうだよ」と言いながら何くれとなく世話を焼き、家にも遊びにつれてきていた。何か、気になるのだろう。

やはり社会性は、日常生活の中で様々な経験を重ねて身につけていくのが一番のようである。

《施設》での生活が長くなった私も、勇に負けないよう社会性を身につけなければ・・と梅雨空を見上げながら思った。 倉沢智子

現場から

のびやかにふくよかに II

笹山 恵理

光の子どもの家を構成する家々が取り囲む中庭に続く各家の花壇などには、梅雨の兆しを待ち焦がれるようにあじさいの花が色をつけ出しています。

皆様いかがお過ごしでしょうか。お伺いいたします。

ここで暮らし始めて二カ月ほどたった頃、一つの大きなニュースが舞い込みました。新しく一人の男の子が入所することになり、新たな入所に備えて担当を持たずにいた私にその子を担当することが決まったのです。

二才八カ月。「その子が結婚するまで頼むよ。」菅原先生の言葉を耳に入れながら、心は不安に染まっていきます。

その子の人生に決定的な影響を与えてしまうだろう私の言動や人格・・・耐えられるだろうか、こんな大きな責任に・・・一年前に二週間の実習をさせていたでいて、ここで勉強できたらどんなにいいだろうかと、就職先に決め、沢山の応募者の

中から選んでいただき、こうして、今、ここにいます。

就職したいと決めた時に、自分なりに光の子どもの家での暮らしをイメージしていたはずだったのですが、実際に子どもを担当する事を告げられると、潰されそうなプレッシャーを感じます。何て身の程を顧みない厚かましい自分なのだろう！

その子は、乳児院で年齢が上がったので措置変更という形で光の子どもの家にやって来ます。つい先頃ここに引越してき

たばかりですから、住む場所の変化は誰にとっても気楽に出来るものではないことを知っています。ましてこんな幼い小さな心にも、どれだけ不安を感じ、負担になるか想像もつきません。

そんな不安や負担を少しでも軽減しようと、担当する私の顔を覚えて貰い、抱っこが出来る様になるようにと入所前面接を光の子どもの家ではしています。初めての面接の日、先輩の坂

巻保母の介添えで、リラックスしようとしても、いつの間にか肩に力が入ってしまう私の前に、やはり、緊張で顔をこわばらせ、体を固くした小さな男の子が、ジーッと私の顔を見えています。

乳児院の婦長さんが、「これから住む場所が変わることをよく分かっていきます」ということと、今会っている私が担当になることも伝えてあると言います。

私を見てまず不安が襲ったのでしょうか。しばらくして緊張がほぐれ始め一緒に遊び、抱っこも沢山したのですが、帰り際、出来るだけ明るく、そして優しく、「待っているからね」と言葉かけると、また体を固くさせるのがはつきり見えるのです。

そんな風にしか不安を表現することが出来ないで、その心の内は、私の想像などほるかに超えた厳しいものなのでしょう。私は、その乏しい想像力を駆使して、その厳しい寂しさややりきれなさを考えることが、ありの子にとって何よりも身近にすることになり、それが重要なことなのでしょう・・・

予定より入所が遅れたことを何とか成績は受験できる範囲まで取り返したが、それなら本当に辞めると言いだした保母がいた。当時は職員採用が困難を究め、北海道や沖縄まででもこちらから出向いてお願いするような有り様だったから、管理する者は非常に困り果て、とうとう十一月になり、「経済的に困難だ」と言い出したのである。

そこで、ヴォランティアたちと募金活動を展開しながら進学資金を確保し、当時の養護施設からの進学率が10%未満だった高校へ、職員を説得し続けて、進学を果たしてくれた最初の子どもである。

それはまた、私にとって養護問題の並々ならない様子を伺わせ、それに真正面に向かい合っている事を要求され、現在までの取り組みを継続させる最も重要なエネルギーを与えてくれたきっかけの一つとなっている。

このことを通して、養護施設の問題は優れて家族問題であり、それはまた、社会的な広がりの中で解決を図らなければならぬものであることを学び、子どもへの養育は、親や家族の協力を

チャンスに、乳児院の方々の協力で、和ちゃんが入所前に日帰り光の子どもの家に遊びに来ることにもなりました。

たんぼの中の風景がめずらしく、池の金魚やアヒル、犬の口など生き物にたくさん興味を示し、小中学生のお兄さんお姉さんにたくさん可愛がられ、最初の緊張は徐々にほぐれていきます。庭をぐるぐる回り一通り楽しむと「帰る」と言って帰っていききました。

その日から一週間後、「帰る」と言って帰れない日がやってきました。たくさん大人の都合で、すべてが決められ、けれどもお父さん、お母さんを始め、たくさん大人の健やかに育ってほしいという願いを背負って和ちゃんはやってきました。

光の子どもの家との出会い、私との出会いが和ちゃんにとってプラスになり、健やかに育ってくれたら、私の生きたことが意味のあるものとなるでしょう。そのために、和ちゃんの良い環境となっていきたい。そのため努力を怠らない自分でいられよう・・・

養護メモ 56

家族 その十 『協力』 2

菅原 哲男

その夏休みの半ば、施設のあたる湘南の小さな駅の階段を降りてくる小柄だがスマートな母を、彼はまぶしそうに顔を伏せながら見たが、何も言わずに私と母とが交わす挨拶を私の後ろに回って聞いていた。

施設の人たちには合わせる顔がないという母の思いを受け入れて駅前の喫茶店に、私と並んで彼、それに向かい合って母が自然に座を占めた。

色白の母の顔はかわく間もなく濡れて、しばしば会話を中断しなければならなかった。

一通り挨拶と用件のあらましを確認し終えて、三〇分ばかり用事があるからと言って私は席を外し、母子二人だけの時間をつくるために外に出た。

私が席に戻ると、これまで何回も何回も説明し、高校へ行くことを勧める私の言葉を受けられなかった彼が、母から、「今の時代は高校を出ていなければ小さな資格さえとることが出来

ないからね、先生の言うようにさせてもらったら」という母の一言で、「ホントおれなんか高校へ行ってもいいのかい？」と顔をこちらに向けたのである。

それから、高校進学へ向けた取り組みが始まり、何よりも、彼の生活づくりの中に、母と兄、そして姉という家族が訪問や帰省など強力な関わりを始めた。

遅れていた学業成績を取り返そうと始めた彼との学習の様子を見て、何人かの保母たちが、「あの子本当に高校へ行く気のないよ。」とか、「私、彼とこれから三年なんかとてもやれないわ。」などとひそひそ話をするようになり、また彼は、「ヤッパ、ダメじゃん。」と言い出し

て投げやりになったりした。私の借りていたアパートが施設と学校の途中にあり、その鍵を渡して、テープ・レコーダーに課題や難しい問題の解き方を吹き込んでおいて勉強を続けたりもした。

何と成績は受験できる範囲まで取り返したが、それなら本当に辞めると言いだした保母がいた。当時は職員採用が困難を究め、北海道や沖縄まででもこちらから出向いてお願いするような有り様だったから、管理する者は非常に困り果て、とうとう十一月になり、「経済的に困難だ」と言い出したのである。

そこで、ヴォランティアたちと募金活動を展開しながら進学資金を確保し、当時の養護施設からの進学率が10%未満だった高校へ、職員を説得し続けて、進学を果たしてくれた最初の子どもである。

それはまた、私にとって養護問題の並々ならない様子を伺わせ、それに真正面に向かい合っている事を要求され、現在までの取り組みを継続させる最も重要なエネルギーを与えてくれたきっかけの一つとなっている。

このことを通して、養護施設の問題は優れて家族問題であり、それはまた、社会的な広がりの中で解決を図らなければならぬものであることを学び、子どもへの養育は、親や家族の協力を

得ることで大きな展開を見ること出来ることを教えてくれた。

養育に困難はつきもので、子どもとの関わりに複数の選択肢があれば、最も困難な方を選べば間違いは少ないと考えてきた。それでも、特に思春期の子どもたちの次から次へとしてくる反抗や自分勝手な批判、減らず口、無謀な自己主張、怠学や家出―家出して帰って来なかった養護施設の子どもはこれまで一人もいなかったが・・・などへの対応に進退窮まり、あるいはどうすればいいのか見当さえ見失うことがしばしばである。

そんなきわどい状況を親や家族と分かち合い、ある時は帰省を試み、家族に駆けつけて頂いたりしながら、家族の持つ、特に情緒的な力によって切り抜けてきたことは枚挙にいとまがないほどである。それは、私の養護活動の主柱をなしている。

そんな家族との協力、日常的な学習活動の展開に、教師、学習ヴォランティアなど多くの人々の協力を得、光の子どもの家の中学卒業生全員の高校進学を実現し、退学者はまだいない。

日誌抄

四月十一日
五月末日まで

四月十一日 栗橋駅前タカラブ

ネよりシユークリームを。

十七日 日本赤十字奉仕団と光

の子どもの家後援会合同の草
取りご奉仕。園庭がきれいに
なりました。団長さんより、
もっとものを大切にしよう
躰なさいとご意見も。感謝。

十九日町内大塚重吉氏よりエレ

クトーンのご寄贈。感謝。

二十日 郡市陸上大会 安田貴

志八百m走、走り高跳の二種

目で県大会出場権獲得。

二五日 江森ヘヤーサロンより

散髪のご奉仕。毎月。感謝。

二六日 剣道郡市大会 佐藤拱

県大会出場権獲得。

○小学校の児童との熱心な文通

指導で古河市の小野田正弘氏
漢子を訪ねて下さる。

三月二日 株式会社小池屋の社

員有志よりポテトチップスを。

四日 第十回子ども祭 曇天を

見上げての準備開始からだん
だんお天気が良くなり、地域
のお友だちやお客様がたくさ
んおいで下さり、飯田洋司さ

んのすてきな音楽、みんなで
準備した子どもたちの劇やコ
ント、合唱などと、ゲームや
模擬店などを楽しむ一日。

○加須市礼羽の大沢守氏より缶

に貯めた硬貨をどっさり。

十五日 設立当初からご支援の

千葉県葉園教会の婦人会有

志が来訪して見学と交歓を。

十七日 中学校からの家庭訪問

開始。大変な年齢の子ども十
一名の家では見せない横顔を

ご報告

六月十日、第二回光の子ども
の家バザーは、好天に恵まれ、
盛大に楽しく行われました。

このバザーの収益金五十万円

は、社会福祉法人光の子どもの

家にご寄付いたしました。

全国からの品物のご提供や、

当日は朝早くから、地域や静岡

横浜、東京などから四十数名の

方々のご奉仕など、心から感謝

してご報告申し上げます。

一九九五年六月十五日

バザー実行委員会

金子 嘉男

梅沢 三保

伺い今後の関わりなどを協議。
○郡山市菅野クリニック院長菅

野圭樹先生来訪して診察と関

わりのスーパードライブなど。

二二日 後援会総会。熱烈ご支

援の地域の方々が参集して。

○浦和児童相談所より田部和貴

二才八月の入所依頼。

二五日 田部和貴の入所受け入

れと笹山恵理保母の担当を浦

和児童相談所に通知。

二六日 田部和貴に光の子ども

の家の様子を知らせ、担当保

母と抱っこが出来るようにし

て入所時の不安を緩和するた

めの入所前面接。笹山恵理、

坂巻照子保母が乳児院へ。

二七日 第四三回理事会。一九

九四年度事業報告、決算の審

議と承認など。

二八日 設立準備当初から熱心

にご支援やご指導などを賜つ

た梅沢一郎前加須市長急逝。

駆けつけて弔意を表す。

三〇日 町内赤井龍雄氏よりジ

ユースをたくさん。感謝。

三二日 故梅沢一郎氏告別式。

全職員参列哀悼の意を表明。

このような足どりをもっと確か
にと、願っています。(くら)

反射光

☆雨に洗われた
緑が見事に輝き
一切手を抜くこ

となくやってくる季節のきまじ
めさに感動を覚えます☆第二回
のバザーは、その朝までの雨が
上がり、少し暑さを感じるお天
気に生まれ大盛況でした☆地域
の方々も準備の品物集めから値
つけ、当日の朝早くからうどん
を打ち、おでんを仕込み売る側
の責任を果たし、買い物に沢山
おいでいただき、和気に溢れた
一日でした☆バザーに先立ち、
朝日新聞の丁寧な取材を受け、
あれから十年後の私たちが地域
との関係の移り変わりなどと、
バザーの案内まで地方版ですが
大きな紙面を割いて下さいまし
た☆逼迫の法人会計にしばらく
の潤いを感じます☆何よりも、
各地から沢山の人々の心を集め、
この地域の人々とのもう一つの
出合いの場になったことが最大
の利益です☆人々の思いや心は
決してお金で購うことは出来な
いことも確認しました☆後姿が
見え始めた新世紀を担う子ども
たちの養育の責任の厳しさに痛
切な思いを深めながら。(哲)